慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 野村浩一著『近代日本の中国認識』 |
| Sub Title | Kōichi Nomura, "The cognitive attitudes toward China in modern Japan" |
| Author | 内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 1981 |
| Jtitle | 法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.54, No.12 (1981. 12) ,p.124- 129 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 紹介と批評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19811215-0124 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 紹介と批評

野村浩一 著

## 『近代日本の中国認識』

日本の近代がいわゆる「帝国主義」の時代によつて触発されたことは、われわれの近代を思い識る上で不可欠の要件である。いわばわれわれには歴史的拘束条件として、帝国主義が聳立していたのであつた。したがつて、自由民権も大正デモクラシーも、この桎梏ぬきでは評価することはできないのだし、十五年戦争も、戦後の経済成長そして海外経済進出にも、この根本的に拘束されたわれわれの同時代性は貫通してはいないだろうか。

この桎梏は、当然、さまざまな陰影を同時代人に与えている。それをとき明かすことが、少なくとも近代日本政治思想史の課題にほかならない。なぜなら、その時態に住み生きた者が、自己の精神にそれをどのようにとらえこみ、あるいはそれに埋没し、あるいはそれから解放することで歴史を生きる、その仕業こそが、かぎりなく人であることをつくりあげているからである。

ここにとりあげたのは、中国近現代政治思想史を対象としてきた著者が、視点を日本からの中国照射にずらして見た論考を集めたものである。著者は、中国近代思想の展開について、まずは自分なりの見通しを立てようと考え、できればそのあとで近代の日中関係の歴史を辿つてみたいと漠然と考えていたときに、故竹内好に、「むしろ両者は並行して勉強する必要がある」と教示されたことを述べている。どちらかといえば意図的に著者が取組んだ平行的研究のこれは一面なのだ、ということを忘れてはなるまい。

著者みずからに語らせれば、第一部収録の二論文は、「近代日本の中国侵略と中国革命の展開という歴史的事実を大前提に、おおむね近代における日本と中国のあり方をトータルに問題にしようとするものとなり、かつとりわけこの歴史的事実との関連において、いわば日本の中国認識の欠落部分に照明を与えようとするもの」（傍点＝著者）である。

第二部収録の三論文の「問題の所在は、近代における両国のあり方を大きく問うというよりは、むしろ相互に流動する日中の対応関係の中で、危機的な状況を打開し、かつそれぞれ独自の中国認識を構築しようとした人物を、まさしくそうした観点から取り扱う」ものである。以下、私が読んだところをもつて著者を追及してみることにする。

### 一

《アジアの近代》、それを著者はどのように見たのか。「アジアは、ヨーロッパ近代世界の中へ、強制的につきこまれたのであり、

アジアの近代とは、極言すれば、ヨーロッパ近代の反射であるとすらいうことができる。それは別の面からいえば、近代西欧の論理が全世界的に貫徹して行く過程であり、逆に、アジアがヨーロッパの植民地となることによつて、その論理の貫徹を裏側から証明して行く過程でもあつた。ともあれ、アジアの近代とは、アジアがアジアでなくなりつつある時代にほかならなかつたのである」（四頁、傍点＝内山）と著者は言う。

このアジア近代史の唯一の例外は日本だ、と指摘されるとき、「おそらく中国を認識することは、日本を認識することである」（一一三頁）という認識はどのように結びついてゆくのか。これを見透すことがなければ、中国の近代を対象とすることでの有意な研究はありえまい。

第一章「近代日本における国民的使命観・その諸類型と特質」で大隈重信・内村鑑三・北一輝の三人がとりあげられているが、こうしたとりあげそのものが著者の思想史構成の方法論上の問題として論議の対象となりうるところであるにちがいない。しかし私は、それをあえて無視することができる。というのは、誰をもつて思想史の構成者とするかは、構成させる者の意志と結果に唯一にかかわるところであつて、あたかも当てがいぶちのようにかたはしから人間を拾いあげる問題意識欠落の思想史（そんなものは思想史でも歴史でも何でもない）を排除するテコと私が考えているからである。

大隈がとりあげられた視角は、不平等条約撤廃後の日本および日本人の情状、つまり「自らの存在の維持に精一杯であつたわが国は、ほぼ日露戦争を境として、ようやくある程度のゆとりをもつて、その存在理由を問うに至つた」（六頁、傍点＝著者）ところで、その「理由」を「東西文明融合論」に求めた、その影の部分を思想的に照射することにある。存在理由として「国民的使命」論議が呼びおこされたことは、ネーションとして凝結することで、日本人が世界の中の日本としてみずからアイデンティファイする契機であつたろう。しかし、大隈の〝東洋に対しては西洋文明の説明者〟〝西洋に対しては東洋の代表者〟という形、つまり説明者・代表者を根底の認識とする意識構造が、その現実的表現である「日英同盟」と「支那保全論」に投影されれば、西洋方式による中国開発志向となつて霧消してしまう。つまり、大隈の使命感は「日本の生存の論理」として確立されたのである。

大隈の「偽善をすてて、『世界の日本』の使命を打ち立てる道は、きわめてロジカルにいえば……、あえて東洋の『非文明』を代表して、西洋の『文明』に挑戦し、まさにそのことによつて東洋の代表者となるか、あるいは、西洋の『文明』に内在しつつ、それを徹底的に批判することによつて、新しい進路を切り開いて行くか」（一四頁）にならないわけにはゆくまい。

著者が北と内村をとりあげたのは、この困難に立ちむかい、「その試みは、必ずしも十分に成功したとはいい切れない」にしても、この二人のアウトサイダーが、「近代日本の運命の中で『生存の論理』と『倫理』という課題を極限にまで追求し、そのことを通じて逆に、アジアの中の日本という運命に密着した使命観を樹立しよ

う」（一四頁）とするところに、思想的営為の意義を認めたからにちがいない。

内村にとつて、「西洋文明とは、自由、進取、共和という人類進歩の理念以外の何物でもなかつた」（一九頁）のであり、その代表は何よりもまず英国であつた。しかし、義戦たるべき日清戦争が不義の戦いであり、義の代表者でなければならなかつた英国の南阿戦争もまた不義性を明らかにすることで、日英同盟そのものが「野合的同盟」たることを露呈する。ここから内村はみずからの思想的位相に突入してゆく、つまり、東洋への回帰あるいは現実の権力闘争から歴史の真実を聴取する（往々にして歴史に埋没する）のではなく、西洋からキリスト教とキリスト教文明を識別することで、「むしろ西洋文明に一層内在し、さらにそれを突きぬけることによつて、そこに西洋そのものを批判する視点を獲得した」（二二頁）のであつた。

だからこそ、「『西洋の東洋への先駆者—東洋の西洋への弁護者』という規定から、最後に『宗教的日本による新文明の創造』という課題に至るまで、内村の使命観の辿つたサイクルは、近代日本のコースの上に派生した他のいくつかの使命観が、どの点において決定的な虚像におちいつたかを、余りにも明らかにてらし出していたのである。」（三二頁）

内村と対極に立つたのは、いうまでもなく、「生存の論理」の中に「生存の倫理」を見極めようとした北一輝であつた。彼の視線は、日本の保全のための支那の保全という大隈を峻拒する意味での中国四億万民の独立の擁護であり、「アジアの中の日本という立場を忠実に追求することによつて、その運命に密着した使命観」（三八頁）が浮かびあがつてくる。対西洋を認識のバネとする彼にとつて、明治以後の日本の発展は徹底的に内発的でなければならなかつた。

著者は、「北が日本の〈近代〉をこのように規定して、西洋—東洋の文明的価値序列を全く否定した時、この両者は、もつぱら民族的覚醒の次元において捉えられるに至つたということである。いわばこの時、北は、両者の対立を民族の存亡という次元においてのみ把握したのであり、それゆえここでは、その対立の決済は、ひたすら赤裸々な『強力』に委ねられる他なかつたのである」（三九頁、傍点=内山）と指摘して、北における西洋文明と東洋文明の廃棄、そして民族の覚醒と、そこから生み出されるべき力に対する信仰の創造性を見てとつた。

内村と北にあつて、「使命実現の努力は、外に対する戦いであると同時に、内に対する戦いという意味を帯びてくる。彼らの使命観が、単に外在的な行動目標の提示にとどまらず、常にその実現のために内部的な革新と内発的なエネルギーを要求した理由は、ここにあつたといつてよい。換言すれば、その使命観の提示を通じて、近代日本のいわゆる文明開化のコースに構造的な対立と、またそれに対する働きかけを試みていたのである。」（四四頁）

## 二

国家・国民統合を至上命令とした同時代性は、結局のところは、

内に「民族」を醸成し、そしてその「民族」を見きわめ、「民権」を限りなく止揚することで過程化するのではなく、むしろ外に「民族」を切り返していつたわれわれのポジを、著者はネガにうつしかえる作業を続ける。第二章「近代日本の中国認識」は、テーマを〈大陸問題〉にすえることで、「近代日本の中国認識失敗の歴史であつた。そして、この歴史は、現在もなお、基本的に変わつたとはいえない」（四七頁、傍点＝内山）とする著者の問題認識にせまる内容を示している。

〈大陸問題〉という問題の立て方は、中国の問題が「わが国にとつて、近代西洋の侵出の前に立たされた近代アジアの運命の問題ではなくて、むしろ一つの地理的・物理的な大陸の問題、領土の問題へと転化したのであり、そしてまた、中国問題は、明治の後半から大正の時代をくぐり抜けるにつれて、何よりも思想・文明の問題であるよりも、むしろ力関係によつて支配される政治の問題へと転化していつた」（四九頁）ところに、その重大さが象徴されているのである。

第二章は、その意味で、内田良平、吉野作造、北一輝、そして武者小路実篤・芥川龍之介らの大正知識人、ならびに堺利彦・山川均らの社会主義者を経緯とする大陸問題認識の去就をもつて、逆に日本問題を論じようとしているのである。ここでの論脈は、私にはかなり示唆的だが、ここではむしろ著者が、彼らは一九一〇年代から二〇年代の中国社会の底に渦まく真の力を認識できなかつたとする点から、以下のように「問題」としてまとめあげているところをすくいあげておきたい。

何よりも指摘しておかねばならぬのは、「中国は、この時、たしかに如何とも名状しがたい混沌たる渦の中にはげしく推移し続けていた」し、「それはどのような枠組をもつてしても、容易には捉えがたい状況を呈していた。あるいはまた、それはどのような枠組をも拒否する何物かであつた」（一〇七―八頁）、その時に、われわれの中国認識も分裂し解体する他なく、「この解体を避けようとするならば、そのためには中国そのものの動きに目をつぶる以外に途は残されていなかつた」（一〇八頁）ポイントである。

第二点は、この中国認識は、「中国をその畸形性において捉える中国観の破産的な姿」（一〇九頁）として表出していたことである。これは中国および中国の流動を運動と見ることのない、いわば歴史への盲目的感性であつたかもしれない。だからこそ、著者は第二章で取りあげた認識者たちが、多かれ少なかれ、より普遍的な範疇を駆使する中国観をもつ限りでの有効性を論じたのだつた。しかし、民衆の感性はどうだつたのか。「中国認識をめぐる知識人と民衆との間にこそ、本当の意味での分裂がひそんでいた」（一一〇頁）ことと、そこから支那通や革命加担者たちが、日中関係の悲劇を一身に体現せざるをえない事態が鮮明になつてくる。

大陸問題として中国問題をとり直すことには、だから本来的には、国家の枠組をとり払つて、民衆の動きに目をこらすことが何よりも重大であつた。吉野が辛亥革命から五四運動への過程をデモクラシーの潮流に、北一輝はナショナリズムの胎動に把握したとして

も、それが「内なるあるもの」との戦いとして、歴史普遍的に確認され、世界にたいする目につらなるところで内にかえされたものでなければ、領土問題に、そして赤い夕陽の満州に死んだ十万の生命と二十億の国帑というスローガンに吸収しつくされるたぐいのものでしかなかつたのである。

## 三

第二部は、「『アジア』への航路――宮崎滔天の思想と行動」、「尾崎秀実と中国」、「橘樸――アジア主義の彷徨」の三論文がおさめられている。滔天論は最近かなり行なわれているし、渡辺京二『評伝宮崎滔天』（大和書房、一九七六年）でもユニークに語られているところだから、ここでは本文を読んでもらうことにする。ただ、前述したように、民衆の動きそのものが中国でなければならなかつたのだ、とする著者の指摘、したがつて中国認識において、たとえば滔天のような運動者が、この民衆とともにあらんとしたところでの悲劇を、「こうした歴史状況の中で、滔天が、日本人革命家としての彼に期待された役割を果して行く過程は、逆に、とりもなおさず、彼が『支那』国民となり、『支那革命派』となることから次第に遠ざかつて行く過程であつたにちがいない」（一四八頁）と言いつくしているところはあげておかねばなるまい。

尾崎秀実にしても、民族運動の、とりわけ運動の中に民衆を見るべくして見ていつたはずである。そして、尾崎は、その運動の本質を自己解放に見たからこそ、「まさにこの一点こそは、歴史をふり返つてみる限り、近代日本において、とりわけ、明治末、大正以降のわが国において、ついに人々が決して十分に把握し切れなかつた問題だつた」（一九一頁）と著者によつて評価されたのだつた。

「日露戦争の翌年から日本の敗戦の日までという時期をとれば、彼の思想と行動の変遷の中には、明治、大正、昭和を通じての中国問題の在りようが、その一身に凝縮されつつ示し出されていたといつていいかもしれない」（二〇九頁）と著者が見抜いた橘樸論は、私の関心もあつて、もつとも挑戦的であり、戦闘意欲をかき立てられるものであつた。

橘については、最近、山本秀夫氏の編集による『甦える橘樸』（龍渓書舎、一九八一年）が出版され、やはり山本氏の『橘樸』（中央公論社、一九七七年）によつて、かなりアプローチが容易になつたものの、彼の思想と行動は、支那の民衆と国家との有意な接合への追求にしぼられる点で、必然的にわれわれの側での有意な接合に照合すれば、そのイロニーがきわだつてくる点で、重大な対象になるはずである。

著者はいう。「近代日本のアジア主義は、その内実において、たぶん最もすぐれたものを橘の中に生み落しつつ、その時、それは、ついに現実の定着点、支柱を見出しえぬままに、むなしく中国大陸のうえを彷徨していたのである。そしておそらくそれは、同時にまた、近代日本におけるアジア主義の歴史的終焉を意味するものでもあつたにちがいない。」（二九八頁）

私事を語つておきたい。私はかげりのない政治学で政治学をはじめる、という幸運をになつた。言いかえれば、そのノッペラボーな顔に、しかしながら、自分で目鼻だちをつけねばならぬ課題を負つたのだつた。それは分析的事実や歴史的事実とされたものを拒否することにほかならない。それが衝迫したのは、アメリカ政治学のイデオロギーとしての近代化論からの脱出を意図しなければならなくなつたときである。

それは私に、二つのことを同時に、しかも有意に交錯させながら、私に生きることを命ずるたぐいのことであつた。その一つは、政治学を人間が生きるためのものにすることであり、もう一つはさまざまな近代をさぐることであつた。その場合、近代とはいかなる意味でも、人間に生きることを積極的に続行させるものであることがらでもある。

前者については、結衆から共住へのシナリオで構想されつつある。後者は、研究者になる以前からの私のモチーフである日本の近代をさまざまに見ることで、多分、私の時間はなくなると予想していた。

この両面作戦は私には苦闘といえる。とくに後者については、どうしても、「周辺」の人びとに私をのり移させねばならない。私はのり移りたくても、それをとがめだてする自分を識らねばならないのだ。それを私はほとんどはじめて自分の意思で行つた水俣で確認したのだつた。

私が目鼻をつけるのは、実に私の抱いている《人間》なのではないか、と私は思つた。しからば、誰かこれと同じ作業をした人たちがいるにちがいない。その意味でウェーバーもマルクスも、レーニンもルクセンブルグも読めたし読もうともできた。しかし、気になつたのは、日本人の目鼻立ちである。それも私が生まれ育つた、そしてやがて死ぬであろう、その時代の人たちの作業だつた。

大正・昭和に生きた人たちの作業をなぞるのは、私にとつて苦痛がある。というのは、私がいま思つていることが、あまりにもさまざまに明らかになるからである。

著者野村浩一氏は私と同年齢。くたびれていた私が、野村さんの目鼻づけに興味をもつたのは当然である。しかし、蛇をつつき出してしまつた感が深い。それは私のアジアへのこだわりといつたものを、野村さんに明確な形で突きつけられたからだ。一種のうらみとともに、野村さんの論考が、いまわれわれに突きこんできている、世界と人間の状況にたいする認識の点で、誤まりないことを書きとめ、現代の中の現在、そして現在の中の現代を人間の営為としての思想史に突きとめようとする人びとに、どんなにもして読んでもらいたいと思い信じて、本書を呈示したい。（四六版三〇六頁、研文出版、一九八一年、一九〇〇円。）

内山　秀夫